

嘉永大地震洪浪記

淨国寺 法潤

嘉永大地震洪浪記

淨国寺

法潤記

嘉永甲寅仲冬五日地大震海鳴如レ雷 峻浪衝陸民  
舍堤防悉頽 沈溺失命者不可枚舉 豈勝感慨哉因

賦一律以記時變云

陰陽奮激地頻震又怪群雷<sup>轟</sup>夷海中逆浪捲沙高似レ岳巨舩走  
陸疾於風庶民沈溺救無術厦屋崩摧勢甚雄歎息乾坤有奇變  
江村頃刻竟為空

嵩園法潤拜

時年  
十九

于時嘉永七年甲寅冬十一月四日辰中刻俄二大地震 同日  
五六度小揺有り 同翌五日申ノ中刻又大地震引續<sup>ツク</sup>キ 津  
浪同夜四ツ時又大揺同月廿日頃迄八日々頻<sup>シキリ</sup>ニ小揺 其後  
毎日少しツ、震<sup>フル</sup>事于レ今不<sup>レ</sup>止<sup>安政二卯</sup> 此霜月五日ハ冬至ヨ

三月下旬

三日目也 扱豆州ヨリ熊野汐ノ岬<sup>ミサキ</sup>邊迄八 四日辰下刻二津  
波<sup>アガ</sup>上ル 同日同刻當辺モ彼津浪ノ響ニヤ海面浪高ク<sup>カツラ</sup>鯉嶋

モ浪ニテ隠レ 或ハ汐干テ常ニ見ヘザル処アラハ顯レ候事也 翌

五日ハ殊ノ外天氣宜敷風モ不レ吹海モ靜なれハ 浦々ニ網

つかひ致す程の事 然るに同日申ノ中刻前日ニ倍する大

地震 良ヤシバラクフル 暫震ふて止ヤミ々ると 海底鳴動して西少し南ニ

當テ大砲オホツクの如く夥敷オヒタシキナリ鳴音幾個と云ふ數カズを不レ知 耳を

貫ツラヌく斗り其恐

しき事云ハん方なし 是津浪の前表なりナルトキ 鳴時ナルトキ西の方に黒雲一ト  
有之アタカ 恰も其中にて響

様一候 又右の響ハ何國イツク 夫より引續き申下刻津浪打寄せ一番

浪ニても西の方と聞ヘ候よし

ハ新シヅバシ蘭橋までカラスメン蘭田ニテハ雷宮の前迄 二番汐ハ伏木浦迄

三番目ハ蘭田カラスメン鳥免邊迄 都合三度也 去サレヌる永禄十六年(元)

癸未十一月廿三日の津浪ハ寄ヨセク來る時は 甚オダヤカタ穩ニして引

汐烈敷ハゲシき事しニテ有之候由 亦夫より五年後ち宝永四年丁

亥十月

四日 嘉永七年迄

百四十八年ニナル

之津浪も同断ニテ引汐ニハ烈しき由 右

度之津浪前ニハ井の水乾き候由 其時之汐ハ藺田烏免迄當  
寺本堂の雨アマだり石まで 又北塩屋浦王子權現の層磴キザハシ三段  
つかり候由 津浪は川口の明處アキ々依り損亡の甲乙あるべ  
し 此時ハ川口西の方に明ありし故ならん 此度は塩屋  
川に口明有之候ゆへ歟王子權現の層磴キザハシ十三段ツカ漬り 両塩  
屋の損亡甚し 尤も昔の津浪と違チガひ此度の寄来る浪は烈  
敷事 恰も矢を射る如く 川口に繋ぎ有之大船小舟一散  
ニ逆流サカナガレ 或ハ岩内馬場近邊迄至り 或ハ入山より少し南  
蟹田橋カニダ迄上ノボるもあり 又四百石餘の船野口村高森川原迄  
上ノボり候 又伏木浦川邊に圍カコひ置有之候材木逆流れ 名屋  
浦又新町下野端々の家を破り 其材木藺田或ハ田井領吉  
原領へ流し行有之を見るに如何様水嵩カサ五寸にも足さる所

に 尺余りの式三間の材木流行 勢ひ寄来る浪の烈しきハゲ  
事可レ知 然れ共川口の明所ニ依るか藪田ハ烏免少し下もシ  
迄 當寺も裏ウラ八門カマヘノソト外の畑ケ漬ツカり候へ共 是は西より押来オシク  
る汐にて 東ハ吉尺餘も低し 又表は門前の道まで 此汐  
も西より來り東清水橋江落る 尤も汐ハ寄来るなり 直  
ニ引く故三度迄來り候へ 共其間アヒダワツカ 僅ニ一時計り也 此變に  
恐礼レて藪御坊邊之人は 皆々丸山鐘卷キ或は富安邊江迄  
け 五日の夜ハ藪御坊に人氣ヒトゲなし 併し當寺は昔の噺を  
聞傳へ候故 家内吉人も不レ逃 皆々東シ裏ニて地震を避サ  
け居候 乍去後難を恐れ人々

の進スメに順ひ 御本尊様并御寶物等翌六日入山三宝寺是は親類

也故へ預け置 夫よりハ地震も次第に穩ニ相成候故 同十二日

迎へ歸り奉る 尤五日津浪前ニ地震を恐れ御本尊并ニ御  
影様等長持ナガモチニ納め奉り 同夜は東し裏ニて奉ニ守護一誠ニ恐

レ多き事々也 此度郡中海邊大荒左の通り

切目嶋田村 印南浦 南塩屋浦 北塩屋浦 名屋浦

濱之瀬 三尾 阿尾 産湯 比井浦 阿戸 横濱皆々流失

網代浦中皆々流失 濱之瀬六十三軒流失同所八地震ノ事を避ん

とて小舟に乗り居候て而 津浪の爲十式人溺死す 前二記

す五人も右十式人の内ニテ 小舟ニ乗りツイ竟ニ水死す 亦名

屋浦源藏ハ上荷ニ参り由良の湊網代浦ニかトリ有之候処

是も津浪の爲ニ命を失ふ事可あわれむべし 憐々く

又津浪も御坊村ニテは中町ハ御坊裏ラ門少し北迄 西町ハ

清水橋筋迄 東町ハ下シモ少々 凡今度の津浪ハ此辺ニテハ昔

の津浪とハ五寸斗り低ヒクき耶カと覺ヘ候 又此度は津浪前ニ井

の水を見るニ常の如し

藪浦ニテも麦田細共四十丁餘流失 併し荒れの不同あり

汐少し入り候處ハ津浪後六七日の間ハ麦青々として 夫

より段々と枯行ありカレユク 又枯跡へカレアト 早速麦蒔候へマキ 共生不申ハヘ 又  
處に依り生るも有之 菜花ナタ子ハ汐跡へ植候へとも付き不申候  
當寺も田畑共ニ反餘し麦不レ残汐ニて枯候て迷惑之事に  
候

小川或は田畑に鯉螺コイイナス鱸鯛鰈キタイカレイ其外川魚等夥敷汐の爲に  
死し 有之候を拾ひ得て食し候とも毒なし

濱之瀬切レ戸キト 昔の津浪ニて切連候（む）故名付候よし 此度ハ

汐同所迄来り候へ共越し不申候

情ツラツラ 此度の時變を思ふに 去ル嘉永五子夏諸国大ニ旱魃也ヒデリ

又翌嘉永六癸丑年も大旱ニて 同年秋西少し北の方ニ 陽

氣星アラハ顯る 亦今年寅も雨の潤ひ鮮スクナし 如レ是前年より陰

陽和順ならざる故箕已ニ當寅夏六月十四日夜も九ツ時より

大地震ニて 和州奈良郡山ナラ又伊賀の上野 伊勢四日市

其外處々大荒れ 併し此邊ハ同夜度々震候へ共 甚夕輕

し 又々法度の大變是れ陰陽不ルニ和順一故耶カ



## あとがき

本書原本は御坊市浄国寺に所藏されている。これは嘉永大地震津浪の記として獨立した書冊でなく、同寺に伝える過去帳の一部に記されたものという。昭和四十六年十二月末、紀州信用金庫本店に於て、たまたま野村佐吉郎氏と逢い、同氏よりこのコピーを贈られたものである。

昭和四十七年一月六日

清水 長一郎

## 嘉永大地震洪浪記の活字化終えて

標題では嘉永大地震と<sup>（元）</sup>なっているが、『稲村の火』で有名な安政の地震の事で、永禄・宝永にも南海・東海道に巨大地震が起きていることが記されている。この資料は御坊市史や日高郡内の資（史）料編には採用されていない。またこの毛筆書きは楷書に近いが読みづらく、由良の小出先生に教示いただきました。改めて御礼申し上げます。

平成十八（二〇〇六）五月十日

清水 章博